

9月15日 一般質問 藤沢の田んぼを残そう！



こんにちは！柳田あゆです。

今回のテーマは【水田の保全】です。藤沢にも水田地帯が残っていますが、市中央部の『城・稲荷地区』の水田は、圏央道のインターチェンジに近いために開発圧力がかかり存続が危ぶまれています。そこで、水田を残すための提案をしようと本会議に臨みました。

藤沢市の農業のいま

藤沢の農業は、消費地に近い「都市農業」の優位性をいかして、鮮度が求められるトマトやキャベツが国の「指定産地※」となっており、養豚も県内トップクラスです。一方、水田については、昭和 48 年の 402 ha が今は 104 ha と四分の一に。コメ消費量の減少と米価の低迷、高齢化と後継者不足などの構造的問題に加え、稲作は「土地利用型農業」で面積がものを言いますが、地価が高い藤沢では大規模な稲作経営は難しい。それにコメは保存できるため消費地に近いという優位性は発揮されません。



そして都市開発です。平坦で面積が大きい水田は、物流センター等への転用に「うってつけ」なのです。

一般質問の
録画はこちら⇒



※【指定野菜】と【指定産地】

指定野菜は、野菜のうち特に消費量の多い物を国が定めています。

指定産地は、その指定野菜を毎年作ってくれる規模の大きな産地を国が指定しています。指定野菜の価格が安くなった場合に、来年も野菜を作ってくれるように指定産地の農家にやすくなった分だけ支払う制度があります。

指定野菜は、キャベツ、きゅうり、さといも、だいこん、たまねぎ、トマト、なす、にんじん、ねぎ、はくさい、ばれいしょ、ピーマン、ほうれんそう、レタスの 14 品目です。(農水省 HP より)

「ライスセンター」で農家の支援を

このように藤沢の稲作は厳しい状況ですが、学校給食に新米を提供し子どもたちから好評ですし、藤沢産100%の酒米で日本酒をつくるなど明るい話題もあります。そこで私は「農家の負担を軽減し稲作を続けられるように、『ライスセンター』を設置し市も参画したらどうか」と提案しました。ライスセンターとは、育苗から、田植え、刈り取り・脱穀、調整まで、稲作用の農機具を共同で利用する施設です。平塚市では行政の支援で設置されており、二つ目のセンターも来年度に稼働する予定とのことでした。これに対する経済部長の答弁は「農家がやるというなら、市もできる限り支援する」と前向きなものでした。続いて市長に「次代に水田を引き継ごうと頑張っている農家の心意気に応えて欲しい」と質しました。(裏面へ)

鈴木市長「田んぼ」を保全する決意を表明

「水田を次世代につなぎたいというのは、私も農家の皆さんと同じ思いだ。水田は本市にとってかけがいのない、大変貴重な地域資源だと思っている」「今年の『ジャンボタニシ』の駆除作業には私も参加したが、地元高校生など 200 人も市民が参加した。若者が水田耕作に関心を持ち関わってくれることは農家のモチベーション向上に直結し、大変心強く思っている。今後も市民とともに、藤沢の水田を保全する取り組みを進める」と水田保全への決意を示してくれました。今後の政策展開に大いに期待します。

コラム 藤沢から食の安全安心を

【食料・農業・農村基本法】は農政の基本理念と政策の方向性を示すもので、制定から 20 年が経過し内外の情勢が大きく変化したことから、政府は法改正に向けた『最終とりまとめ』を示したところです。

食料自給率 38%の日本の食料安全保障の脆弱性は主要国で突出していて、政府案はその点を強調し食料自給率の他に【食料自給力】を示しています。もし日本の全ての農地と農業技術・労働力を「フル活用＝花を育てている農地や耕作放棄地も全て食料生産に使用」して食料生産した場合はどうなるかというもので、試算の結果、カロリーの高い「いも類中心の作付け」の場合に国内自給が達成されます。

～いも類中心の作付け～(農水省『知ってる？日本の食料事情 2022』パンフレットを元に作成)

朝食



朝食 食パン 1 枚、焼き芋 2 本、サラダ 2 皿、リンゴ 1/6 個

昼食



昼食 焼き芋 2 本、粉吹きいも 1 皿、野菜炒め 2 皿

夕食



夕食 白米茶碗 1 杯、粉吹きいも 1 皿、浅漬け 1 皿、焼き魚 1 切

* 上記で 1 人・1 日あたりのエネルギー 2,418 kcal となり必要分を満たす。だが、日本国内の畜産はトウモロコシ等の飼料用穀物を輸入に頼っており食料自給力には反映されないため、牛乳は 4 日でコップ 1 杯、卵は 14 日に 1 個、焼き肉は 14 日に一皿、となってしまう。

しかし、一日のメニューはご覧のとおり、今の日常的な食生活とはかけ離れたものになります。この現実を踏まえて国民的な議論が必要だと言うのが政府の考えで、私も異論はありません。また、資材高騰を小売価格に転嫁できず苦しいとの生産者の声に応え、適正価格に向けた仕組みづくりも入りました。生産コストを適正に評価することは大切ですが、所得が上がらないなかで食料が値上がりするとますます国民生活が苦しくなります。消費者負担ではなく直接農家を支える政策が必要で、財源を所得税の累進課税や資産課税にすれば格差是正策としても有効だと多くの識者が指摘をしていますし、私も同様の意見です。

【農は国の基なり】。藤沢でも野菜や畜産などを中心に市民へ安心安全な食材を供給する都市農業が活発に展開されています。これからも、私は市内農業の活力を保つため提言をしていきます。



柳田あゆ 生まれも育ちも鶴沼海岸、「引地川のあゆ」です！

2023 年 4 月 藤沢市議会議員選挙 初当選

市議会では会派【民主クラブ】に所属。建設経済常任委員会
行政改革等特別委員会、広報広聴委員会の各委員を務める

～鮎は河川環境の指標生物～

私の「あゆ」という名前の由来は魚の【鮎】です。

「川をきれいにする」という思いがこめられています。



情報発信中！